



| | |
|--------------|---|
| Title | フレーム意味論と直接スコープから見たベトナム語、日本語および英語の感情概念：ベトナム語のgiân、日本語の「怒り」、英語のangerを比較して |
| Author(s) | Doan, Ngoc Minh Tran |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 91-104 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/91584 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フレーム意味論と直接スコープから見たベトナム語、日本語および英語の感情概念 —ベトナム語の *giân*、日本語の「怒り」、英語の *anger* を比較して— DOAN NGOC MINH TRAN

1. はじめに

Lakoff and Kövecses (1987)は、心理学の観点に加え、認知言語学の観点から、感情を表す語（以下、「感情語」と呼ぶ）に注目し、英語の感情語の一つである *anger* の比喩表現を分析した。彼らは、「*anger* の生理的反応は *anger* を代表する」「*anger* は容器内の液体」といった身体的経験に基づいたメトニミーとメタファーを抽出し、感情の理解に関して、メトニミーとメタファーは重要な役割を果たしていると述べる。また、英語話者が、*anger* に関する出来事を理解し、行動しているのは、感情の原因、生理的的変化、反応などといった典型的な理解モデルからなる知識を持っているためであると指摘し、*anger* の典型的な理解モデルとして以下の 5 つのステージを提示した (p.211)。さらに、感情に対応した身体的経験、特に生理的経験は人間に共通しているため、感情の理解に関して、身体化された文化普遍的な基本モデルがあると主張している (Kövecses 2000:146)。

1. Offending Event → 2. Anger → 3. Attempt at control → 4. Loss of control → 5. Act of Retribution

表 1 : *anger* の典型的な理解モデル(Lakoff and Kövecses 1987 : p.211)

2 節でも確認するように、確かに Kövecses らの研究は、感情の普遍的側面に注目することで大きな成果を挙げていると言えるかもしれない。しかし、その一方で、3 節以降に議論するように、感情に関する従来の議論の大半は生物学的な観点から見た感情の普遍性のレベルに留まるか、あるいはそれを超えた言語の機能と感情の関わりということに関しては、英語の言語文化の影響下でなされてきたものであるという印象を受ける。したがって、Kövecses らの研究はベトナム語や日本語など他の言語文化では「感情」がどのように捉えられているのかが正確に把握できていない可能性が残る。

このことを前提に、本稿では、英語の *anger* とベトナム語の *giân*、日本語の「怒り」に関する感情語は母語話者のどのような背景知識を活性化するかを調査する心理学的なテストを行い、その結果に基づく認知言語学的分析を行うことを目的とする。特に、3.3.節と 3.4 節に詳しく議論するように母語話者を対象に、英語の *anger* とベトナム語の *giân*、日本語の「怒り」の理解を調査してみると、言語ごとに固有の理解方式があることを指摘する。より具体的には、個人主義文化である英語の言語文化で使われる *anger* は、個人の権利と利益が侵害される観点からの解釈を中心とし、相手との関係に関わらず、自分の状態と攻撃的な態度に焦点を当てられる傾向にある。一方、集団主義文化に分類される日本語の「怒り」やベトナム語の *giân* は、集団の中の慣習を破ったことに注目した解釈を中心とし、相手と自分の関係にまず焦点が当てられるという特徴が見られることを議論する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第 2 節で先行研究を概観する。続いて、第 3 節では、2 つの調査結果を示し、英語の *anger* とベトナム語の *giân*、日本語の「怒り」の理解モデルがそれぞれに持つ個別性について議論する。第 4 節では、3 つの言語の理解モデルを提案する。第 5 節では、本稿のまとめを述べる。

2. 先行研究

本節では「感情」に関する先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。まず、2.1 節では、「感情」を文化普遍的なものとみなす先行研究の代表例として、生理学的観点から見た「基本感情説」(Ekman 1973) を紹介する。続いて、2.2 節では、メタファーの観点から見た「感情の概念化」(Lakoff and Kövecses 1987; Kövecses 2000) について説明する。それから、感情を文化の産物とみなす、社会文化心理学と言語学の観点からの先行研究を見る (Markus and Kitayama 1991; Jozefien De Leersnyder; Boiger and Mesquita 2015; Mesquita 2001; Wierzbicka 2001; Lutz 1988, 2016)。

2.1. 「感情」を生理学基盤に基づく文化普遍的なものとみなす先行研究

生理学の分野では、身体的経験を重視し、感情を「長い進化の歴史によって定められた、先天的に設定された脳の装置に応じて生物学的に決定されたプロセスである」(Damasio 1999 : p.51)¹と見なす。言い換えれば、人は文化を問わず普遍的に「基本感情」を持ち、基本感情は人類に普遍的であるということである。そのような考え方の代表であるエクマン(1973)は、*surprise, fear, anger, sad, disgust, happy* の感情とそれを表す顔の表情が全人類に普遍的であり、生物学的基盤を持つと述べる。

身体的経験が言語の重要な基盤をなしていると考える認知言語学の分野では、「感情」の概念化が、言語表現の分析を通して様々な観点から論考されてきた。初期の研究として、Lakoff and Kövecses (1987)は、認知言語学の観点から、英語の感情語の一つである *anger* の比喩表現を分析した。彼らは、「*anger* の生理的反応は *anger* を代表する」「*anger* は容器内の液体」といった身体的経験に基づいたメトニミーとメタファーを抽出し、感情の理解に関して、メトニミーとメタファーは重要な役割を果たしていると述べる。

- 「*anger* の生理的反応は *anger* を代表する」の一般的なメトニミー
 - (a) Billy's a hothead. (体温の上昇) (Kövecses 1987: p.197 斜字は原文による)
- 「*anger* は火である」のメタファーと「*anger* は容器内の熱い液体である」のメタファー
 - (b) She was doing a slow burn.
 - (c) You make my blood boil. (Kövecses 1987: pp.198–202 斜字は原文による)

まず、(a) は、「*anger* の生理的反応は *anger* を代表する」という一般的なメトニミーを利用している。また、Lakoff and Kövecses によれば、(b)(c) に見られるように、怒りの生物学的影響の文化モデルのうち、特に「熱」を強調するという特徴は「*anger* は火である」と「*anger* は容器内の熱い液体である」という一般的なメタファーを形成するとされる。

つまり、Kövecses らは、感情に関する慣用表現はばらばらに存在するのではなく、メタファーなどを基盤にした一貫性を持ち、また、感情を引き起こす典型的な状況やそれによって起こる身体の生理的変化は「典型的シナリオ」(典型的理解モデル) の形で構造化されると主張している。

“1.Offending Event→2.Anger→3.Attempt at control→4.Loss of control→5.Act of Retribution”

表 1 : *Anger* の典型的な理解モデル (Lakoff and Kövecses 1987 : p.211 再掲)

渡辺 (2018 : p.2) によれば、上述した Kövecses の一連の感情論は非常に強い影響力を持ち、この研究を出発点として、日本語や中国語などの研究でも、*anger* に相当するとされる感情概念の分析が多く提案され、感情語研究の分野では「怒り」をテーマとする一分野を形成しているという。

Kövecses (2000) では、Lakoff and Kövecses (1987) が英語の理解モデルの妥当性を確認するために使用した but-test² を用いてハンガリー語母語話者を対象にした調査を行い、英語と同様の結果が得られたと報告している (p.144)。ここで、but-test とは (d) (e) のような例文を用いたテストである。

- (d) Max got angry, but he didn't blow his top.
- (e) *Max got angry, but he blew his top. (Lakoff and Kövecses 1987 : p.217)

¹ “biologically determined processes, depending on innately set brain devices, laid down by a long evolutionary history.” (Damasio, 1999: p.51).

² この but-test というのは、典型的理解モデルと呼ばれるものが実際に典型的であることを検証するために使用される言語テストである。

一般に、*but* を用いた文の後件では、前件からの期待に反する状況が表される。したがって、英語の *anger* のように、復讐意欲の含意がある感情語が前件にあるとき、(d) のような内容が後件に置かれれば、*but* を適切に用いていると判断される。一方、(e) のように、前件から十分予想できる内容が後件で表されてしまうと、*but* の使用は容認されない。

Kövecses は、英語の *anger*、ハンガリー語の *duh*、日本語の「怒り」、中国語の *nu* の比喩表現の分析から、4つの文化は、感情の理解に関して、“Cause → Emotion → Control → Loss of Control → Behavioral Response”という同様の基本構造を有すると主張している (p.58)。さらに、Kövecses は、*anger*, *sadness*, *joy*, *fear*, *love* の 5 つの感情を基本感情と位置付けている (p.3)。Kövecses によれば、普遍的な生理学の観点から考えると、異なる文化のメンバーは、普遍的な生理学と矛盾する方法で自分の感情を概念化することができない。一方、普遍的な生理学によって課せられた制約の中で、さまざまな方法で自分の感情を概念化することを選択できる (p.165)。

しかし、Kövecses が提案した *anger* の典型的理解モデルには、必ずしも普遍的とは言えない部分も存在すると言える。例えば、ベトナム語の *giận*³ という感情語の例を見てみよう。Kövecses の提案に当てはまる表現も見られる一方で、*giận* の理解モデルには、*anger* の理解モデルと異なり、復讐意欲の含意が義務的ではないという特徴が見られる。このことを、(f)(g) を例に見てみよう。

- ベトナム語 :

- (f) Cô áy giận nhung cô áy im lặng. (作例)
彼女 あの giận が 彼女 黙る
(あの彼女は giận したが、黙った。)
- (g) Cô áy giận nêu cô áy im lặng. (作例)
彼女 あの giận だから 彼女 黙る
(あの彼女は giận したので、黙った。)

ベトナム語の *giận* は、*anger* と異なり、復讐意欲が必ずしも義務的ではないことを見てみよう。まずは、英語の例 (d) で見たのと同様の例として (f) を見られたい。(f) のように、逆接を表す *nhưng* を用いた文の場合、前件に *giận* を用い、後件で「攻撃的な行動からは予想しづらい行為（すなわち、黙ること）」を表せば、適切な文として容認される。しかし、これに対して、ベトナム語の *giận* では、(g) のように、前件と後件の内容を変えずに、順接を表す *nêu* を使用することも可能である。この場合、*giận* は「悲しさ」のような受動的な感情を表すため、*nêu* を使っても不自然ではなくなるのである。

すなわち、感情の概念化を説明する際、Kövecses らによる「身体の生理的経験基盤」に基づくアプローチは確かに有用であるものの、メタファーとメトニミーのみに頼った分析では、ある言語の母語話者が「感情」をどのように理解しているかを十分に説明できない問題も残ると言える。

2.2 感情を「文化」の産物と見なす観点

続いて、感情を「文化」の産物と見なす先行研究を概観する (Markus and Kitayama 1991; De Leersnyder, Boiger, & Mesquita 2015; Mesquita 2001; Wierzbicka 2001; Lutz 1988, 2016)。その上で、本稿の立場を述べる。

³ “English – Vietnamese Dictionary” (Vietnam Institute of Linguistics 1993 : p.52) によれば、英語の *anger* は “sự tức giận” (類別詞 + 認義語) ”に訳された。しかし *tức giận* は ‘tức + giận’ という二つの単語から成る複合語である。*tức* の基本義 (詰まる) は「体の特定の部分に何かが引っかかったり、圧迫されたりして、非常に不快な状態」を指す。それ以外は、*sự nóng giận* (熱い + giận) , *sự giận dữ* (giận + 強い) , *cơn giận* (短期的な giận の状態) などの名詞もある。本稿では、生理的反応を表す語を除いた *giận* を研究対象とする。

2.2.1. 社会文化心理学による「自己」と「感情」の解釈 (Markus and Kitayama 1991; De Leersnyder, Boiger, & Mesquita 2015; Mesquita 2001)

・文化による「自己」と「感情」の解釈 (Markus and Kitayama 1991)

Markus and Kitayama (1991)によれば、文化が異なる場合、自己、他者、および両者の相互依存の解釈は著しく異なるといふ。そして、そのような解釈の違いによって社会状況の解釈も制約を受けるため、社会状況の認識も異なるとされる。

例えば、集団主義が中心的な東洋文化では「個人同士の基本的な関連性を主張するという個性」が明確であり、「他者への配慮や調和のとれた相互依存」が強調される。このような自己観を「相互協調的自己観 (interdependent construal of the self)」と呼ぶ。一方、個人主義が中心的な西洋文化では、個人は「自己に注意を払い、独自の内的属性を発見して表現する」ことにより、他者からの独立を維持しようとする。このような自己観を「独立的自己観 (independent construal of the self)」と呼ぶ (pp.226-227)。

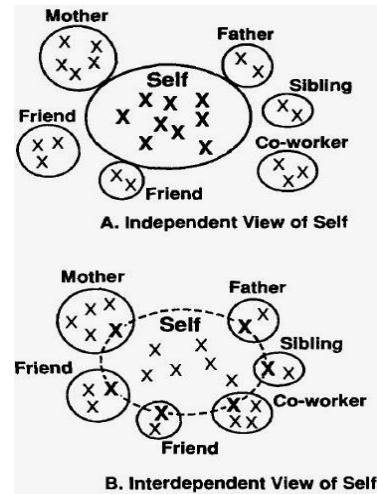


図1：独立的自己観と相互協調的自己観
(Markus and Kitayama 1991 : p.226)

したがって、Markus and Kitayama は、感情的な経験は自己の解釈によって体系的に変化し、かつ、自己の解釈によって「自己中心的感情 (ego-focused emotions)」と「他人中心的感情 (other-focused emotion)」という2つの感情があると主張する。その違いが具体的に現れることとして、独立的自己観の人の感情表現は、anger、sadness、fearなどの内なる感情を文字通りに表現するのに対して、相互協調的自己観の人の感情表現は、相手と自分の関係を反映することが多く、内面の感情に直接関係しないことがある (p.236)。

・「感情」は文化的価値を反映する (De Leersnyder, Boiger, Mesquita 2015; Mesquita 2001)

De Leersnyder et al. (2015)によれば、同じ文化の人であれば、人間関係のゴールを共有すると、同じ感情を経験する傾向があるという。つまり、感情の経験よりも、文化の基準に基づく状況の評価が先立つということである。また、状況評価の違いの根底には文化間の価値判断の違いがある可能性も指摘されている。

- 1) “Differences in the most important cultural values may underlie some of the differences in appraisals: People will appraise emotional situation according to their meaning with regard to important values.”
(De Leersnyder, et al. 2015 : pp.12-13)

例えば、個人主義文化の社会では、個人の自律性を維持しながら、お互いの独立をサポートする。したがって、個人の自尊心や自律性の反映と言える anger のような感情は、高く評価される。対照的に、日本のような集団主義文化における社会では、相互に依存し、互いの期待に適応することをゴールとする。その場合、自分の行動を調整する必要があるため、自分の欠点を反省することが重要な価値を持つ。したがって、他者との調和を促進する「恥」のような感情が、引き起こされやすくなる (pp.7-8)。

Mesquita (2001) の研究では、個人主義者と集団主義者の文脈における感情の違いに関する仮説を検証するために、心理学的調査が実施された。個人主義の文化に属するオランダ人と集団主義の文化に属するスリナム人およびトルコ人を対象者として、6種類の場面における感情に関する自己報告を行った。その結果、個人主義の文化と集団主義の文化における感情は以下のようになったという。

| 個人主義の文化における感情 | 集団主義の文化における感情 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・個人の基準および目標に基づく ・個人の主観的な感情に焦点を当てる ・相対的な社会的地位への影響はあまり重視されていない | <ul style="list-style-type: none"> ・社会的価値の評価に基づく ・大部分は、個人の内面ではなく、現実を反映している ・自己の主観性に限定されるのではなく、自己と他者の関係に属している |

表2：個人主義の文化と集団主義の文化における感情の特徴 (Mesquita 2015に基づく)

つまり、感情は集団主義と個人主義の文化の核となる特徴を反映すると言える。そのため、相互作用や人間関係の中で展開される感情というものの自体が、文化によって異なる可能性があると考えられる。

2.2.2. 言語に着目した「文化固有の感情」 (Wierzbicka 2001; Lutz 1988; Lindquist, Gendron, and Satpute 2016)

続いて、言語に着目した感情の普遍性の議論を見てみよう。Wierzbicka (2001) は、様々な言語における感情表現の研究を基に、エクマンの基礎的感情モデルに反対している。Wierzbickaによれば、感情に関する議論の多くが英語の感情語を基にしており、かつ議論自体も英語でなされているため、それぞれの言語文化の文化固有の感情を正確に理解できないという。エクマンのモデルに代わって、Wierzbicka (2001 : p.17) は、*anger*などの感情語は、特定の文化モデルの価値観や先入観などを反映すると主張する。つまり、感情の経験は、文化シナリオを背景にしているということである。

続いて、文化人類学における研究も見ておく。Lutz (1988) は、感情語は、共通の文化的背景を持つ聞き手に、精巧な「シナリオ」やフレームを呼び起こすと主張している (p.10)。有名な例として、集団主義文化のミクロネシアの Ifaluk (イフォラック) 語の *song* という感情が挙げられる。

イフォラックは太平洋西部カロリン諸島の珊瑚環礁であり、人口は約 430 人である。イフォラックの価値観の最も重要な特徴は、非攻撃性、家庭内および家庭間での協力と分かち合い、そして、集団内の服従に重点を置く点である (Lutz 1982 : pp.113-114)。イフォラックの人々の間では、*song* (正当な怒り) という感情概念がよく使用され、日常生活に浸透している。*song* は、英語の *anger* のように「望ましくないことに対する不快感」を指すが、その不快感が生じる原因という点で *anger* とは異なる。*anger* は、感情発生の主な原因が個人の欲求を拘束されることであるが、それに対して、*song* はだれかが島の道徳的価値観や規則を侵害したときに生じる感情であるという。Lutz (1988 : p.178) は、個人主義のアメリカで用いられる *anger* は、個人の権利に対する感情を表す一方で、イフォラックの *song* は、社会的規範に対する感情を表し、かつ、個人は権利の結びつきとしてではなく、人間関係の構成要素として見なされていることを指摘している。

心理学の分野でも、感情を個別のカテゴリーとして認識する際に、言語が担う役割を強調する立場がある (池田 2018)。例えば、心理構成主義と呼ばれるアプローチでは、言語が表象する概念化によって、生理学的状態 (core affect・コアアフェクト) の解釈がなされ、はじめて感情として経験されると主張している (Lindquist et al. 2016 : p.580)。コアアフェクトは、「感情価」と「覚醒度」という2つの要素から構成される (Russell : 2003)。

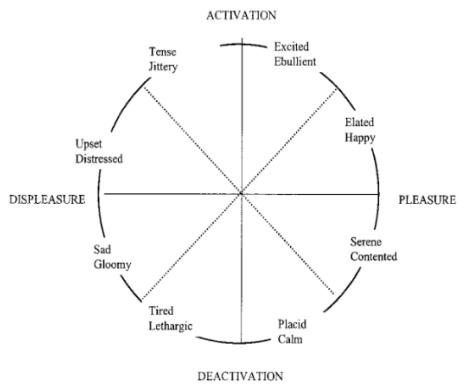


図 2 : Core Affect (Russell 2003 : p.148)

・**感情価 (valence)** (横軸) : 「感情がポジティブかネガティブか」を表す。

・**覚醒度 (arousal)** (縦軸) : 「感情状態の強さ」を指す。高い覚醒度は「行動を準備する活性化された状態」である。一方、低い覚醒は「無気力や休みの状態」を指す。

例えば、図 2 が示すように、英語の *sad* は displeasure + deactivation の感情である。

これまで見てきたように、人間は生物学的基盤や進化的基盤を共有する側面があるとしても、抽象的な感情の捉え方には、文化もさまざまな形で影響を与えると考えられる。つまり、Ekman や Kövecses らが提案した英語の基本感情も、英語文化を反映している可能性がある。そのため、ある言語文化が感情をどのように捉えているかを知るためには、生物学的基盤や身体的反応だけでなく、母語話者がその感情に対して有する背景的知識を知る必要がある。

次節以降は、英語の *anger* と日本語の「怒り」とベトナム語の *giận* に関する感情語が母語話者にどのような背景的知識を活性化するかという心理学的なテストを行い、その結果に基づく認知言語学的分析を行い、Kövecses の理解モデルの妥当性について検討する。

3. 母語話者による「感情」に関する「背景的知識」の心理学的実験

本節では、英語の *anger* と日本語の「怒り」とベトナム語の *giận* が、それぞれの母語話者にどのように捉えられているかを調べるために行った 2 つの心理学的実験の結果を示す。続いて、認知言語学の「フレーム」 (Fillmore 1982) と「スコープ」 (Langacker 2008) の考えを援用し、その結果に基づく認知言語学的分析を行う。

3.1. 前提となる諸理論：「フレーム」 (Fillmore 1982) 、「直接スコープ」 (Langacker 2008)

• フレーム (Fillmore 1982)

フレームとは、言語表現によって喚起される「背景的知識」であり、その表現の意味を正しく理解するために必要不可欠なものであるとされる (Fillmore : 1982)。例えば、BUY という語を理解するには「買う人はお金を売り手に渡すということと引き換えに、商品を受け取る」という商取引の背景的知識が必要である。逆に、BUY という語は「商取引」のフレームを喚起するとも言える。

• 直接スコープ (Langacker 2008)

Langacker (2008 : p.63) によれば、直接スコープ (immediate scope) とは、「指示対象を特徴づけるのに最も関与性があり、際だっている領域 (onstage region—注目を集める一般的な領域)」とされる。例えば、英語の NIECE は、親族関係のシステムを背景的知識としている。しかし、NIECE の概念を理解するためには、親族システム全体が必要なわけではない。図 2 に示すように、すくなくとも <親><自己><兄弟姉妹の子供> が NIECE の直接スコープを構成する (Croft 2018 : p.63)。

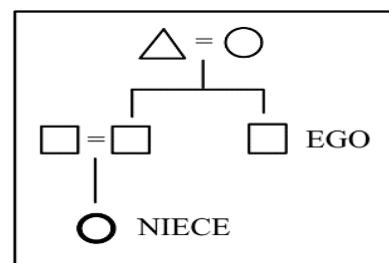


図 3 : NIECE の直接スコープ
(Croft 2018 : p.63)

3.2. 実験①：感情経験の自己報告（英語の *anger*、ベトナム語の *giận*、日本語の「怒り」）

【目標】：それぞれの感情語が母語話者のどのような背景的知識を活性化するかを調査する。

【方法】被験者：英語母語話者（2人）日本語母語話者（3人）ベトナム語母語話者（3人）

実験の流れ：用意した Google Form（参考文献図4）に母語で「自分の感情経験」を思い出しながら、それについて詳細に記入してもらう。

【仮説】：個人主義文化の英語は「自己中心の背景的知識を活性化する」一方、集団主義文化のベトナム語と日本語は「他人と自分の関係中心の背景的知識」を活性化する。

【結果】

- ・日本に住んでいる 40代のアメリカ人男性（母語：英語）

“My coworker who is Japanese asked me about a student that was supposed to start a new class the following week. I said next week is impossible to start because the textbook we will use won't arrive in time. The student can't start next week, in two weeks can start. The coworker asked me again. I gave the same reply. I was asked can't the student start anyways, I said no. This went on several more times. **I was getting upset. I thought it was insulting to me to be asked the same question over and over. I was confused and frustrated why I was asked the same thing so many time. Why ask me the question if you don't value my opinion. My tone of voice changed as I was getting upset.** （一部省略）”

- ・20代のベトナム人男性（母語：ベトナム語）

“I don't have a close friend, so I'll write a story about a family member I consider my best friend. She and I quarreled in the night just before New Year's countdown only 3 hours left. The problem of *giận nhau* (*giận+mutual*) was only a tiny thing, but no one gave up. Hence, it became a big deal and **brought me a horrible experience** after 25 years of living in this world. It started when I asked that person to help me do something. Still, instead of talking softly, she suddenly raised her voice at me, even though I said it a second time in a very soft voice, hoping she would calm down. "Calm down and talk softly," but it doesn't work. And now I couldn't keep my composure and we started talking loudly to each other. **As a result, one person cried, and the other left just 2 hours before New Year's Eve.**”

- ・20代の日本人男性（母語：日本語）

「ある日、深夜にあるコンビニに食料を買いに行きました。深夜帯だったので、他のお客さんはいませんでした。たくさんの食べ物を買い込み、レジに行くと、店員がいませんでした。呼ぶと、アルバイトと思われる店員が店の奥からのっそり、面倒そうに出てきました。レジ袋に商品を詰めてもらったのですが、商品の大きさのバランスが合っておらず何度も袋が崩れました。確かにたくさんの商品を一度に購入して手間をかけさせてしまいましたが、もう少し丁寧に扱って欲しかったし、もし無理なら私に任せてほしかったです。最後には、袋の中からある商品がこぼれ出てしまい、床に落ちてしまったので、店員は無言でレジを出ていき、新しい商品を無言で嫌そうに差し出しました。今までの面倒臭そうな接客態度、買いたい商品を難に扱われたこと、そして、まるで商品を落としたのが購買者である私の責任であるかのような姿勢に対して残念に思うと同時に、怒りが湧き、帰宅後にカスタマーセンターに報告しようかと思いましたが、それほどの問題でもないと思い、やめておきました。 （一部省略）」

【考察】

上記の3つのストーリーは、一見すると、「あることに対する不快感」という点で共通しているように見える。しかし、個人主義文化の英語は「自己中心の背景的知識を活性化する」一方で、集団主義文化のベトナム語と日本語は「他人と自分の関係中心の背景的知識」を活性化するという大きな相違点が見られる。表3を参照されたい。

| 個人主義文化（英語） | 集団主義文化（日本語・ベトナム語） |
|--|---|
| <p>・個人と個人の関係で「個人の権利と利益が侵害される」という観点から記述した。</p> <p>“My coworker who is Japanese...”</p> <p>“I thought it was insulting to me to be asked the same question over and over.”</p> <p>“Why ask me the question if you don't value my opinion.”</p> | <p>・「特定の関係ではどう反応すべきか」という社会基準の観点から記述している。そのため、個人と相手とのつながりを具体化する傾向がある（相手との関係を強調する）。</p> <p>例　日本語：店員と客の関係 「アルバイトと思われる店員-購買者」</p> <p>ベトナム語：親友関係、家族関係 “...a family member I consider my best friend.”</p> |
| <p>・相手と自分の状況に焦点を当てず、その代わりに、感情表現を多く使い（getting upset (2)、confusing、frustrated）読み手に「自分がどう感じていたか」という主観的感情を強調する。</p> <p>例：“I was getting upset. I thought it was insulting to me to be asked the same question over and over. I was confused and frustrated why I was asked the same thing so many times...My tone of voice changed as I was getting upset.”</p> | <p>・内的世界よりも現実を反映している。感情表現をあまり使わず、相手と自分の状況を全体的に表すことで、読み手をその視点に入り込ませ「その関係で相手はどう対応すべきか」「読み手だったらどう感じているか」を理解してもらうことに焦点を置く。</p> <p>例　日本語：「店員は無言でレジを出ていき、新しい商品を無言で嫌うように差し出しました。」</p> <p>ベトナム語：“...and we started talking loudly to each other. As a result, one person cried, and the other left just 2 hours before New Year's Eve.”</p> |

表3：感情経験の自己報告に基づく英語と日越言語の感情における相違点

【理論的含意】

① 「感情をさらされた原因」の判断基準がそれぞれの言語の文化的価値観により異なる可能性がある。具体的には、英語文化では「個人の権利と利益が侵害されるかどうか」という基準に基づいて判断される一方、ベトナム文化と日本文化では「集団の倫理・常識が侵害されるかどうか」という社会的基準に基づいて判断される。

② 言語表現によって関連する「背景的知識」が喚起される（Fillmore : 1982）ため、それぞれの感情語がそれぞれのフレームを喚起する可能性がある。

a. 個人主義文化を背景に持つ英語の *anger* は「個人中心的感情」（Markus and Kitayama (1991) であり、「「個人の権利と利益が侵害されることへの感情」という典型的なフレームが喚起される（Lakoff and Kövecses 1987）。

b. 集団主義文化を背景に持つベトナム語 *giận* と日本語の「怒り」は「他人中心的感情」である。ベトナム文化は「祖国、親戚、家族との密接な絆」という価値観が大事にされる（Nguyen 2016 : pp.34-35）ので、「親密な人がすべきでないことへの感情」が特別視される。

日本文化は「社会の調和的維持を目指した『和』の理念」が重視される（実松 2018 : p.171）ため「怒り」は「常識の理不尽な言動への感情」が典型的なフレームとして喚起される。

また、そのフレームに焦点が当てられる要素（直接スコープ）も言語によって異なる。例えば、*anger* は、原因となる相手との関係を特定せず、自分の状態に焦点を当てる。対照的に、ベトナム語と日本語は相手と自分の関係を具現化する傾向がある。

3.3. 実験②：母語話者による angry - upset/ giận- tức / 「おこる」 - 「腹が立つ」を用いた例文の作成

【目標】：以上の含意を検証するため、母語話者に感情語を用いて例文を作成してもらう。

【方法】

・被験者

| | |
|-----------|--|
| 英語母語話者 | アフリカ系米国人（30代-50代5人）ヨーロッパ系米国人（10-40代3人） |
| ベトナム語母語話者 | 20代（8人） |
| 日本語母語話者 | 20代（5人）40代（3人）50-70代（3人） |
| | |

各言語の感情に関する2つずつの感情語を用いて作文してもらう。その際、必ず感情の「原因」とそれに対する「反応」を入れて、下記の形式で作文してもらう。

英語と日本語の感情語は、実験①の自己報告にあったものである（upsetと「腹が立つ」）。ベトナム語の場合は、生理的な状態を表す *tức* を使用する。

・例文の形式

| | | |
|--|---|-------------------------|
| 1. I was angry that(CAUSE), so I(REACTION). | 1. Tôi (cảm thấy) giận vì..., nên tôi... | 1. 私は（原因）に怒って、（反応）した。 |
| 2. I was upset that(CAUSE), so I(REACTION). | 2. Tôi (cảm thấy) tức vì..., nên tôi... | 2. 私は（原因）に腹が立つて、（反応）した。 |

【結果】

① 英語話者の作文：個人の権利と利益が侵害されたという内容（例：あおり運転や騙されるなど）が多い。また、原因の相手を特定せず、被害を受けた個人の状態に焦点を当てる傾向がある（upsetの場合、感情の度合いが angry より弱い）。

- a. I was **angry** that **someone cut me off in traffic**, so I flipped them off/honked and yelled at them.
- b. I was **angry** that I was **lied to**, so I wanted to fight.
- c. I was **upset** that my new car was **totaled** so I filed an insurance claim.
- d. I was **upset** that I failed the exam, so I cried.

② ベトナム語話者の作文：怒りの原因となった人物が自分と親密であるかどうかが区別される。生理的反応を表す *tức*（詰まる）は、個人の権利と利益が侵害されたという内容が多く、また *tức* の基本義である「詰まる」に由来して、「仕方がない」という意味合いの文も見られた。

e. Tôi thấy tức vì bị dối xúi bất công nên tôi bỏ đi.
私見る *tức* からされる 不当な扱いだから 私離れていく
(不当な扱いをされたことに私は *tức*を感じた。だから、（そこから）離れていった。)

f. Tôi tức vì không đánh con nhỏ dó được, nên tôi trút giận lên bạn thân.
私 *tức* からあの女を殴れなかっただから 私ぶちまけた上 親友
(あの女を殴れなかったことに私は *tức* した。そのため、親友にぶちまけた。)

一方、*giận*を使うと、親密な相手としてすべきではないとのコンテクストが典型的となり、「親密な関係」が具現化される傾向がある。「相手を気にかけているから、この感情を覚えた」という側面が強調されている。また、相手が親密であることから、反応の内容としても「攻撃的な態度」ではなく受動的な態度が多く見られる。

- g. Tôi **giận** vì **người đó** đã không làm được những gì họ hứa,
 私 **giận** から あの人（彼氏）しなかった 得る 複数 何 彼 約束する
 nên tôi đã bỏ về mặc cho họ xin lỗi rất nhiều.
 だから 私 帰った にもかかわらず 彼 謝る たくさん
 (あの人があの人が約束を果たさなかったことに私は **giận** して、彼が謝ったにもかかわらず私は帰った。)
- h. Tôi thấy **giận** vì bị leo cây,
 私 見る **giận** から された 約束が守られなかつた
 nên tôi ngưng nói chuyện với **người đó**.
 だから 私 やめる 話す と あの人（親友）
 (約束を守らなかつたあの人には私は **giận** して、話すのを辞めた。)

③ 日本語話者の作文：20代の母語話者（5人）と40-70代の母語話者とで、相違が見られる。
 まず 20代の日本語母語話者の「怒り」は、個人の権利と利益が侵害されたコンテクストが多い（友達に殴られたこと、将棋に負けたこと、彼氏が浮気をしたことなど）。

- i. 私は花粉に腹が立って机を蹴った。
- j. 私は彼氏が浮気をしたことに腹が立って、彼からの手紙を全て燃やした。
- k. 私は、彼氏が浮気したことにおこって、家から彼を追い出した。
- l. 私は将棋に負けたことにおこって、機嫌が悪くなった。
- m. 息子が嘘をついたのでお父さんが腹を立て、息子を叩いた。
- n. 私は政府の政策に腹が立って、新聞へ投書した。
- o. 私は販売員の対応におこって、商品を買うのをやめた。
- p. 私は店員の態度におこって、本社へクレームをいれた。

このような相違は、「グローバル化の進展により、伝統的には集団主義的である日本において、急激な個人主義化が進んでいる」（荻原 2015）ことで、日本の若者の「怒り」が「他人中心的感情」から「自己中心的感情」になっている可能性がある。

4. 提案：英語の anger ベトナム語の **giận** と日本語の「怒り」の典型的な理解モデル

第3節では、英語の *anger*、ベトナム語の *sự tức giận* と日本語の「怒り」の背景的知識に関する実験結果を見た。本稿が示した2つの実験結果からわかるように、生理的状態だけに注目する *anger* の典型的な理解モデル（Lakoff and Koveses 1987）は、ベトナム語と日本語には当てはまらない部分があると言える。ベトナム語の **giận** や日本語「怒り」も「ある事に対する不快感」という点では *anger* と共通しているものの、その判断の基準や、感情に続いて起こる反応がどのような意味を持つかを正確に捉えるためには、言語ごとの文化的価値観を反映した、個別的なモデルが必要であると考えられる。

本節では、認知言語学の「フレーム」「直接スコープ」の概念に加え、心理的構成主義の「コアフェクト」の概念を援用し、各言語の典型的な理解モデルを提案する。

- 英語の *anger* : 独立した個人からの観点

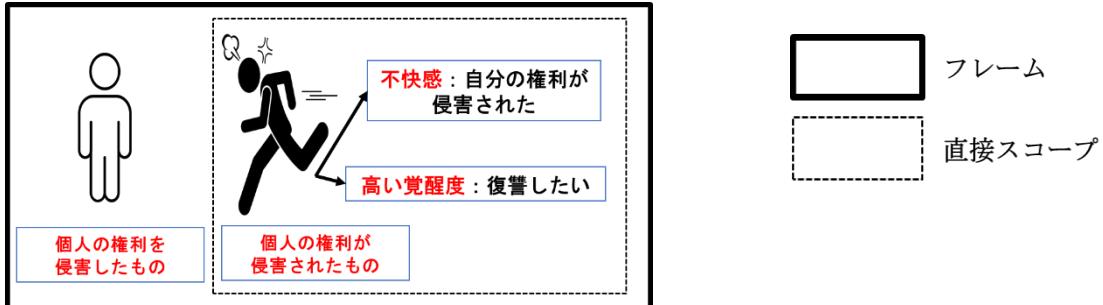


図 5: 英語の *anger* の典型的理解モデル

Lutz (1988) が指摘しているように、*anger* は、個人の欲求や権利が侵害されたこと（フレーム）への感情である。個人の内面に焦点を当てた感情であるため、原因となった相手を特定する必要はなく、もっぱら自分の状態に焦点を当てる（直接スコープ）傾向がある（したがって、受動態や不定代名詞と共に起する傾向がある）。また、その感情の度合いが強くなると、最終的には感情の原因に対して暴力行使する可能性もある。この点については、Lakoff and Kövecses (1987) の *anger* の理解モデルに一致する。

- ベトナムの *giận* と日本の「怒り」：集団の一員からの観点

一方、ベトナム語の *giận* と日本語の「怒り」の典型的理解モデルは、*anger* と異なる。これらはいずれも「他人中心的感情」であるため、「原因である相手との関係」を言語の上でも明示する傾向がある。

しかし、文化ごとの価値観によって、ベトナム語と日本語でもフレーム内の要素がそれぞれ異なる。まず、「祖国、親戚、家族と親密な絆を持っている」という価値観が大事にされるベトナム文化では、「親密な人としてすべきでないことへの感情」が特別視される。また、原因となった相手が親密な関係であることから、感情に対する反応としても、典型的には、攻撃的な態度だけでなく受動的な態度が見られる場合もある。そのため、以下の 2 つの例文は、どちらもベトナム語として自然である。しかし、能動的反応であっても、それは「復讐」ではなく「相手に期待していたのに...」という失望感の含意が含まれる。

- f) Cô áy giận nhung cô áy im lăng. (作例)
 彼女 あの giận が 彼女 黙る
 (あの彼女は giận したが、黙った。)
- g) Cô áy giận nêu cô áy im lăng. (作例)
 彼女 あの giận だから 彼女 黙る
 (あの彼女は giận したので、黙った。)

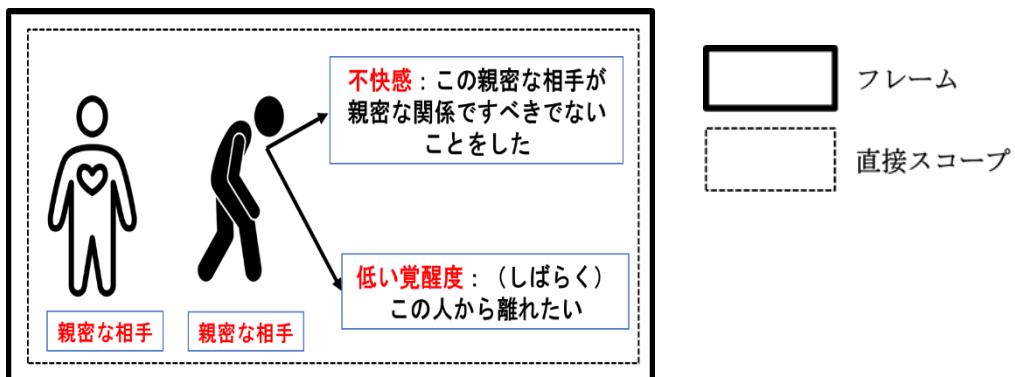


図 6: ベトナム語の *giận* の典型的理解モデル

一方「社会の調和的維持を目指した『和』の理念」が重視される日本文化の「怒り」では、「常識などに反する理不尽な言動への感情」が典型的なフレームとして喚起される。また、社会的規則を侵害したことが原因となって生じる感情であることから、それに対する反応は「復讐」よりもむしろ「過ちや罪、欠点などを指摘すること」に傾く。

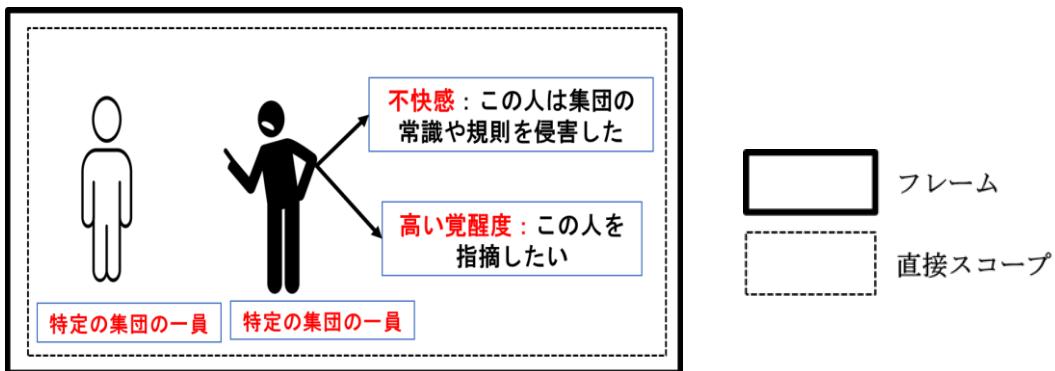


図7：日本語の「怒り」の典型的理解モデル

つまり、英語母語話者の *anger* の反応や行動は、部分的には日本語話者やベトナム語話者においても見られることもあるが、そのような場合であっても、その反応を裏付ける動機は文化によって異なると言えよう。

5. おわりに

本稿では、英語の *anger* と日本語の「怒り」とベトナム語の *giận*について、各感情を母語話者がどのように捉えているかを調べるために、2つの心理学的実験を実施した。その結果を認知言語学の観点から分析および考察し、それぞれの言語文化が有する感情の典型的理解モデルを提案した。

本稿の調査結果が示すように、3つの感情は「ある事に対する不快感」という意味では共通しているものの、その事がどの基準で判断されるか、または、後続する反応がどのような意味を持つかなどは言語ごとに異なる。したがって、文化的価値観を反映した個別的な感情理解モデルが必要となる。Kövecses らが提案した英語の典型的理解モデルも、英語文化の特徴を反映した、言語個別的なモデルであると捉えることができる。

*本稿の執筆にあたり、大阪大学大学院人文学研究科の田村幸誠准教授、同研究科の大森文子教授、大阪大学日本語日本文化教育センターの松浦幸祐特任助教から有益なご助言を頂きました。ここに感謝申し上げます。また調査にご協力いただきました調査対象者の皆様にお礼を申し上げます。

参考文献

- 池田慎之介（2018）「感情の経験と知覚における言語の役割—理論的整理と発達的検討—」『心理学評論』61巻4号 pp.423-444.
- 実松克義（2018）「『和』：日本の調和の思想の起源と本質」『紀要論文』応用社会学研究60巻pp.171-190.
- 荻原祐二（2015）「日本社会・文化の個人主義化に伴う不適応問題の解明」京都大学、博士(教育学)。
- 渡辺秀樹（2018）「英語感情名詞メタファーの系譜 第1回序 及び fear (The Oxford English Dictionary引用例を資料として)」『言語文化共同研究プロジェクト2018』pp.1-18.
- William Croft, D Alan Cruse (2018) *Cognitive linguistics*. Cambridge University Press.
- Damasio Antonio (1999) *The feeling of what happens: Body and emotion in the making of consciousness*. New York: Harcourt Brace & Company.
- Ekman Paul (1973) *Darwin and Facial Expression A Century of Research in Review*. New York : Academic.
- Fillmore, Charles J. (1982). Frame Semantics in *Linguistics in the Morning Calm*. Hanshin Publishing Co., Seoul. pp. 111-137.
- Lakoff, G., & Kövecses, Z. (1987). "The cognitive model of anger inherent in American English." In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought*. Cambridge University Press. pp. 195–221.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lindquist Kristen A., Gendron Maria, and Satpute Ajay B. (2016) "Language and Emotion Putting Words into Feelings and Feelings into Words" in Lisa Feldman Barrett, Michael Lewis, and Jeannette M. Haviland-Jones (2016) *Handbook of emotions (4th edition)* . Guilford Press, New York. pp. 579–609.
- Lutz Catherine (1982) "The Domain of Emotion Words on Ifaluk" . *American Ethnologist*, Vol.9, No.1 pp.113-128.
- Lutz, C. A. (1988). "Unnatural emotions: Everyday sentiments on a Micronesian atoll & their challenge to Western theory". University of Chicago Press.
- Kövecses, Z. (2000). *Metaphor and emotion: Language, culture, and body in human feeling*. Cambridge University Press.
- De Leersnyder, Jozefien; Boiger, Michael; Mesquita, Batja (2015) Cultural differences in emotions. *Emerging trends in the social and behavioral sciences: An interdisciplinary, searchable, linkable resource* 2015.Wiley; Hoboken, NY. pp. 1-15.
- Nguyen, Quynh Thi Nhu (2016) "The Vietnamese Values System: A Blend of Oriental, Western and Socialist Values" . *International Education Studies*; Vol. 9、 No. 12、 pp.32-40.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*、 98(2)、 pp.224–253.
- Mesquita, B. (2001) Emotions in collectivist and individualist contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*、 80(1)、 pp.68–74.
- Russell, J. A. (2003) Core affect and the psychological construction of emotion. *Psychological Review*、 110(1)、 pp.145–172.
- In Jean Harkins, & Anna Wierzbicka (Eds.) (2001) *Emotions in crosslinguistic perspective*. Berlin: Mouton de Gruyter.

辞書類

- Viện ngôn ngữ học [(Vietnam) Institute of Linguistics] (1993) *Từ Điển Anh - Việt* [English – Vietnamese Dictionary]. Ho Chi Minh City General Publishing House.

1.まず、「親友に打ち明けている場面」を想像してください。

そして会話の話題は、あなたの怒りの出来事です。友達が理解できるように、その話を詳しく述べてください。

(*たとえば、何が、または誰があなたを怒らせたのか、その時に、何をしたかったのか、どのように行動したのかなど)。

※もちろん自分の本当のストーリーでも、作り話でも良いです(^^~)。



図4：実験①の GOOGLE FORM